

地域づくりの主体形成と青年に関する研究 (続)

小林 平 造

(1996年10月15日 受理)

A Study on building up Independent Youth Who can create a New Community
(the Continuation of Study)

Heizo KOBAYASHI

はじめに

小論は、同表題論文(「地域づくりの主体形成と青年に関する研究 — 地域社会教育実践論創造の視点から —」; 『鹿児島大学教育学部紀要, 人文科学編』第47巻1996年)に続くものである。前論文と同地域の一, 二の実践も再度とりあげながら関連する新たな地域と実践を紹介しつつ論点を深めていくことを目的としている。ここでは現在の地域に形成される文化と具体的な青年の役割および諸活動の持つ青年の自己形成にとっての意義についてが検討の対象である。

1. 問題の所在

小論の課題は、地域創造の主体を形成する青年教育実践の今日的な可能性と課題を明らかにすることにある。このテーマに迫っていくためには、各実践をめぐる二側面の課題の吟味が必要である。一つは、現代青年の自立の課題である。二つは、地域づくりの主体形成と青年の問題をめぐる課題である。ここではこの視点から、地域青年団運動と現代青年による地域づくりを分析対象として検討をすすめることにしたい。ところで、あらためて言うまでもなく青年教育実践は現在多くの困難をかかえている。この現状を考えると、地域づくりの主体形成の視点を青年の自立の課題と合わせて吟味するという発想自体が今日一般には認めずらい現実として映るであろう。しかし、とりわけ南九州・沖縄の地域青年運動と青年による地域づくりの実践に目配せしてみると、こうした分析に耐えうるほどの質を持っていることが明らかである。同様の傾向はここ数年の東北・北海道におけるいくつかの地域の現状分析からも指摘できる(資料1参照)。

九州・沖縄における諸実践も、他地域と同様の困難を抱えていることはいうまでもない。しかしここでは、青年一人ひとりが自分自身へのこだわりを大切に、自分なりの自己形成と他者と共に地域に生きる生きがいの獲得を十分意識したうえで、地域・社会課題へのとりくみが具体化されている事例がみられる。そもそも近現代日本社会において、青年にとっての地域とは、そこから離脱

していくことによって、自由な自己形成を可能にしたり、青年世代としての個性や文化創造を可能にする対象でもあった。しかし高度経済成長時代をへて、地域における共同体としての質が大きく後退し、地域社会における自己形成の機会を十分獲得せずに幼少年期、青年前期(12・3歳から17・8歳頃まで)を過ごしてした現代青年である。今日、彼らにとって地域とは、子どもや高齢者など他世代との出会いの場であり、地域の豊かな文化との出会いの場ともなっている。また地域に生きる同世代との共感的関係を獲得し、地域に生きる生きがい感を実感し、深める場ともなっているのである。こうした社会背景と実践的な契機を見失ってはなるまい。以下、いくつかの象徴的な実践を紹介し、分析を深めていくことにしよう。

2. 青年と地域との新しい出会いを生み出す実践

「祭り好き 33%」「一生懸命 28%」「まちづくり 26%」「田舎 23%」「熱血 16%」「ダサイ」「古い」とは、青年団に入団して間もない青年の入団以前の青年団に対する印象のベストセブンである^{#2}。まさに「地域で真面目に生きて、祭りや地域行事を行っているダサくて古い青年」がやっているのが青年団なのである。しかしそれは、地域づくりの主体形成の視点からいえば、ダサくて古いどころか、新しく求められる地域の青年像と言えるのかもしれない。その青年団は、1993年には全国3,259市町村中65.4%の自治体になんらかの形で存在していることが明らかになっている^{#3}。これは、「青年団は青年自身のことしかやっていないか」とか、「弱体化し、地域や青年への影響力を無くしている」という一般の推論が、必ずしも妥当ではないことを示している。例えば、ほとんどの青年団は様々な地域行事を展開している。しかし、そのとりくみが多くの場合、地域を興すための事業として青年に自覚され、主体的で創意的な展開になっていないことが問題なのである。

鹿北町青年団の実践 熊本県の鹿北町青年団は、たしかに伝統的な地域青年団活動を継承しながらなのであるが、しかし同時に十分新しい質を持っている。18から25歳の青年25名(町青年人口の1割)で構成される地域青年団である。新しいのは、青年団活動に参加する青年の意識であり、子どもや高齢者などとの世代間交流活動が生み出す青年の意識である。そして多くの地域と同様に、地域生活を豊かにする諸行事が衰退し、変質した地域共同体の現実をこの青年団がかかえているという点である。鹿北町青年団のとりくみは、年間を通じて子どもや高齢者を対象にした行事、ボランティア活動など地域活動と青年相互の交流を深めていく活動を中心にして多彩である。注目されるのは、①サッカー大会・Kリーグ(21チーム、185名参加)を通じた小中高高校生との交流活動である。また、②高齢者を招いて行う多彩な内容を持つ青年祭である。この青年祭には、日頃の他世代との交流活動の総てが生かされている。特に③この青年祭では青年団による一年間をかけて制作される自主映画が上映される。その内容は、地域に生きる青年の実感や生きざまをテーマにしたものである。また④町広報「幸の国」の2ページを使った青年団版掲載がここ40年ほど継続されていることである。このように鹿北町青年団の活動は地域のなかで青年世代固有の役割を發揮しながら位置づいているのである。

小林：地域づくりの主体形成と青年に関する研究(続)

「新しい」と指摘した青年の意識とは次のごとく。「やっぱり、鹿北町に帰ってきたね。何もない小さな町だけど、“何か”があるからここを離れないし、帰ってきたんでしょ。一緒にその何かをさがしませんか。とにかく、“既成の楽しい”しか嫌、疲れることは嫌だとか、人間関係が嫌だとか言わないで、この鹿北町で楽しく生きるにはどうすればいいかを一緒に考えようよ。(中略)結局はこの町のためじゃなく、自分のためなんだよ。(中略)鹿北町について語ろうよ。」(青年団一同より、「町内に残っている若者諸君へ」、『町広報・青年団版』1994年1月号から)。ここには、町に残って生きていくことになった青年が、町のためというよりも、自分にとって意味ある生活をつくりあげるために主体的なとりくみをしていこうとする意識が表れている。いかにも現在の青年らしくていいのである。まず自分があって、その次に地域が見えてくるという筋道なのである。そうした青年たちの世代間活動は、その感想として次のような意識を生んでいる。「毎年、青年祭を最後まで見てくれてありがとう。大の若者が、初めてみんなの前でポロポロと涙を流すのは、おじいちゃん・おばあちゃんの温かい拍手を聞くからです」と。ここには、Kリーグのとりくみを通じて、むしろ子どもに励まされている青年たちがいる。高齢者が感謝と感動で握手を求めて「また生きていたらくるけん」と言う姿に感動している青年たちの姿がある。そして、とりくみのなかでの感動は、地域にいる仲間の大切さを実感させている。「青年祭。フィナーレの瞬間、今までの練習の疲れが一度に吹き飛ぶくらいに、心の底から頭の先までジーンとして、涙がわいてきました。こんな感動は、青年団に入って仲間とのとりくみがあったからこそ味わえた……」「仲間とこの地に生きる喜びがなければ、地域づくりなど始まるはずがない」と(以上、いずれも筆者のヒアリング)。

こうして鹿北町青年団では、何よりも青年の感性や願いが十分に反映したとりくみが具体化されている。そして、地域に生きる青年や他世代の人々とのとりくみを通して、他者や他世代に共感する自分をじっくりと味わいながら、地域に生きようとする自分自身の生きざまを確認していく青年の姿があるのである。それは、いかにも今日の青年らしい地域との出会い方なのである。

沖縄における若者の芸能・文化活動の展開 沖縄では「シマ」とは、集落としての「字」を示すことが多く、「島」そのものを示すこともある。「シマ」は、民衆の生活の場であり、ここでは年中行事として、豊年祭や盆行事などが行われている。いずれも芸能の担い手としての若者が大きな役割を果たす行事である。沖縄本島地域では盆行事に欠かせぬものが「シマエイサー」である。また、八重山地域では、盆行事のアンガマ(石垣市)、豊年祭の旗頭や獅子舞で若者が大きな役割を担っている。いま沖縄では、こうした伝統芸能が青年によって復活されたり、新たな内容にデフォルメされて文化活動として展開されたりしている。また、「さんしん(三味線)文化」がロックやフュージョンなどと融合して新たな青年文化が創造され、マスコミなどを通じて発信されている。とりわけシマの芸能を担う若者たちの基盤は青年会であり、若者による芸能・文化活動の活性化は、青年会の復活や活性化を生み、地域における他世代、同世代との出会いを生み出している。また、エイサー大会や芸能・文化祭典など若者による新たな「祭り」が創出されるなど、芸能・文化活動が地

域の歴史や課題への青年の関心を深めていく契機を生み出している(補論参照)。

県都に隣接する人口約9万人の浦添市では、市連合青年会活動と字青年会活動が停滞していたが、いま地域の高校生や中学生を巻き込んで活性化しつつある。まず、市連合青年会は、解体状況であったが、連合組織に青少年育成部として高校生を中心にした「舜天雅エイサー団」を結成し、勤労青年や高校生、中学生にエイサーを教えることを通して芸能の後継者養成を図っている。それは、同時に将来の青年会を担うリーダー育成のとりくみともなっている。近年の旧盆には、市内50カ所でエイサーを披露する「シマまわり」を実施、大都市部でシマエイサーが消失していた地域に伝統的な地域文化を復活させる担い手として活躍している。同じ浦添市内の一つのシマにある内間青年会は、22年間途絶えていたが、シマにエイサーを復活させたいという青年と地域の願いをもとに、シマエイサーを中心にとりくむ青年会として復活させている。ここでもエイサーの担い手の六割は中高生である。青年会復活の中心になったリーダーのK君やM君は、県青年団協議会主催のリーダー養成塾・「明倫塾」に学び、実践を展開してきた青年たちである。彼らは中・高校時代に非行に走った自分自身を深く見つめ直すことで、地域の人々から信頼を得たいという願いを持つようになり、エイサーを始めている。シマのエイサーは「シマまわり」(字内をエイサーを演じながら練り歩くもの。これによって現世にやって来た御霊の総てを来世に送り返すウークイという盆行事。)を実施してこそ本領発揮である。そのためには、勤労青年だけでなく多くの若者が必要である。内間青年会では、青年達が非行をしている中・高校生をもエイサーに誘い込み、「シマまわり」のできる青年会に成長している。かくして非行している地域の中・高校生が青年会活動によって更生しているのである。さらには、この青年会のとりくみが、内間地区の地域生活に欠かせなかった大都市部の伝統芸能と盆行事を復活させていく重要な契機を生み出しているのである。

沖縄本島北部に位置する人口約3,500人の大宜味村は、地域の過疎化と高齢化問題を抱える自治体である。ここでは、字の青年会はほぼ消滅し、村に一つの大宜味村青年団がある。この青年団は、新たに改良した独自のエイサーの担い手である。彼らは、「青年夏まつり」でこれを演じてきたが、村の中央地域で行うまつりに出向くことのできない高齢者の要望にこたえて、「エイサー部落まわり」を村内の一七カ字総てに実施している。これは約一カ月間継続される一大行事である。このとりくみは高齢者をはじめ地域の人々から感動的に受けとめられ、数えるほどの世帯数になってしまった集落では、涙をこぼし、食い入るように演奏を見つめ続ける高齢者に青年自身が感動しているのである。こうして、この地域の青年たちは、芸能・文化活動を通して、地域の高齢化問題を解決する一つのとりくみを具体化している。同時に、このとりくみは過疎地域の盆行事を活性化ないし復活させる契機となっているのである。

芸能・文化活動と若者の自己形成 沖縄における若者の芸能・文化活動は、担い手としての青年自身の自己形成にとってどのような意義を持つのであろうか。その象徴的な事例を八重山諸島の事例から分析しておこう。

石垣市字登野城のアンガマは字青年会がその総ての担い手である。このアンガマの主役は、遠祖

小林：地域づくりの主体形成と青年に関する研究(続)

神のウシュマイ(爺)とシミ(婆)である。これを担当する役者は、方言を使い、あの世についての機知に富んだ問答を行わなければならない。したがって方言を知らない若者にとっては相当困難な役割である。登野城青年会の広報部長K君は1995年に初めてウシュマイを演ずることになり、旧盆の約一カ月前から方言と踊りの特訓をした。辛い練習ではあったが、本番を迎えると、方言と踊りを習得した自分に対する自信と行事に対する誇りを持てるようになったという。アンガマを継承し演ずることができるのは、その字の若者であり、青年会組織である。いま青年会が弱体化し、若者も地域の芸能に関心を持たない傾向が強くなっている。このなかで、とりくみはこうした体験を持つ青年を生み出しているのである。旧盆のアンガマ(これも、もともとは石垣市の中心地・「四箇字」を中心とする土族階層の行事であった)の他に旧暦六月に行われる豊年祭がある。豊年祭で旗頭を掲げる^{あざしらほ}字白保では、約60kgの旗頭を持つことは若い男性の憧れの的であり、今日的に一人前として認められる意味を持つ。白保青年会のN君は、練習段階では持ち上げることのできなかつた旗頭をそのハレの日に初めて持ち上げることができた。憧れの旗頭を掲げることによって、周囲の人々から認められ、彼は「地域のなかで一人前になれたという実感を持てた」と語っている。

このように沖縄では、若者の芸能・文化活動が、青年に地域との新しい出会いを生み出すと共に、青年自身の自己形成にとっても大きな意味を持っている。すなわち、各世代で構成される地域社会のなかで若者としての自らのアイデンティティーを獲得すると共に、芸能を通して人々がつくりあげてきた地域の伝統と歴史の重みを実感していくことである。ここで注目すべきは次の点である。そうしたとりくみが、古い形態のままに継承されているのではないということである。つまり、先に指摘した今日の意識傾向を持つ青年が、消滅傾向にある古い「芸能」や「青年会(地域青年組織)」に対し、それを今日的に新たに再生していく努力のなかで、青年自身の自己形成をすすめる体験を獲得しているということなのである。ここには、明らかに地域における芸能・文化の新しい継承方法とその担い手形成の筋道が示されている。

3. 地域にこだわり生きる若者が生み出す「青年文化」の可能性

八重山の若い^{うたしゅ}唄者たちと創作エイサー 八重山では、以上の芸能・文化活動を土台にして、新しく創造的な文化活動が青年の手の内から生み出されている。青年団員である平田大一(小浜島在住)、^{しまなかひさし}島仲久(黒島在住)、また日出克(竹富島出身)、新良幸人(石垣市白保出身)、西泊茂昌(与那国島出身)などがそうした動向を代表する人物である。彼らはもともと、各島々に何処にでもいて、さんしんを奏で、^{うたしゅ}創作曲をつくる唄者だということができる。それが今日的な青年らしい感覚の創作と演奏活動を継続することで、芸能をベースにした新しいジャンルを形成し、南の地域八重山から発信し始めているのである。島仲久は現在、竹富町、黒島の青年会長であるが、好きなさんしんと唄による創作曲がNHK沖縄「新しい沖縄の唄」にノミネートされ、『黒島ラブラブ』はこの地域の若者の愛唱歌になっている。平田大一は小浜島に在住し、竹富町青年団協議会の事務局長であ

る。彼は、両親と共に民宿を経営し、サトウキビなどの農作業をし、島の観光案内人を行いながら、青年会活動と芸能・文化活動を通した「シマおこし」にとりくんでいる。さらには、島のマンタ文庫に協力し「紙芝居三太郎」として地域の子ども文化活動にも参加している。例えば、日出克の『ミルクムナリ』（「弥勒の御成り」の意）という創作曲は、小浜島の豊年祭で演奏される芸能そのものがベースとなっている。平田がつくりだす「南島詩人舞台」は、踊りと唄、笛とさんしんとで構成されている。小浜島民謡に特徴的な笛は、彼が少年期、青年前期に参加した島の豊年祭で憧れ、身につけてきたものである。ミルクムナリに伴う独特の踊りは、同様に小浜島の豊年祭で踊られているものである（資料2参照）。

このように、彼らの創作と演奏活動は、八重山の島々の伝統的な芸能に、シンセサイザーや太鼓、独特の楽器（日出克の「古代ギター」等）によってロックやフュージョンなどの要素を加えながらデフォルメさせ、若者の新しいポピュラーソングを創造している。そうであるからこそ、これらの芸能は、地域の若者たちに受け止められ、若者に地域芸能への新しい関心を喚起しているのである。八重山において、現在この動向は一つのブームになりつつある。それは、沖縄本島のエイサーの場合でも同様である。本部町の「八重桜花団」や名護市の「やんばる船クラブ」が、日出克などの新しい創作曲を駆使した今日的な創作エイサーを行う「琉球国まつり太鼓」（沖縄全域を対象にした半プロ芸能集団）の一定の影響を受けて発展し、地域の盆行事としての青年によるエイサー活動に弾みをつけていることと共通している。今日、この激しくダイナミックな創作曲に合わせて踊るエイサーは、沖縄の若者たちの間で一つのブームになっている。それが盆行事としてのシマエイサー復活に大きな影響を与えてきたのである。

鹿児島県知覧町のポスト青年団層による劇団づくり ここでは、青年団活動を終えた若者たちが青年団という「オモチャを取り上げられたような寂しさ」を感じながら、地域の多様な層を集めての「劇団いぶき」づくりを展開している。ポスト青年団層が中心であるが、20歳代の青年の参加も多い。またこの劇団のとりくみは、全国青年大会などで多くの表彰を受けるなど高いレベルの質を持っている。それは、1996年初春には町の人口の約一割にあたる1,200名を集めて自主講演『奇跡・夢咲町商店街応援歌』を行い、町民から好評を博していることにも示されている。ここでも、あくまで自分の願いをベースにしたとりくみである。同時に地域に生きていくことを決断しているポスト青年団層の発想は確かである。劇団代表のM氏（元町青年団長、36歳）は、次のように述べている。「演劇はテレビと違って、地域限定の文化活動です。いっぺんに数万の人に訴えかけることはできませんが、地域の人々の喜びや悲しみ、そして地域のあるべき未来像などをメッセージとして伝えるには、最も効果的な手段だということが分かりました。」「地域が、その独特の感性で文化を創造しようとする力を失った時から、過疎は始まるんだと思います。（中略）守ろうとしていてはだめです。作り出していこうとするエネルギーが文化を生み出し、芸能などを伝承させてきたということを忘れていきます」と（いずれも筆者のヒアリング（資料3参照）。そのM氏は、町の豊玉姫神社に伝わる「神舞」の後継者不足に対し、自ら踊り手を志願しその保存会のリーダーとしても

